



企業編



株式会社  
アキワークス

安岐町富清3209番地2  
創業 平成10年7月 従業員 11名

創業者の松岡勇樹さんは、東京都で建築設計の仕事をしていました。創業の

きっかけは、ニットデザイナーの奥さんのために、展示会に使用するマネキンを、製作したことからでした。建築設計の知識と経験を活かしたマネキンは、奥さんの作品を引き立てたことから、高い評価を受けました。それから改良し、立体形状を分解して再構築する造型手法d-torso（ディー・トルソー）を完成させ、生まれ故郷の安岐町に戻り、平成10年にアキワークスを設立しました。



▲レーザー加工作業

平成13年に「段ボール製組立て式マネキン」でグッドデザイン賞を受賞や、小さい動物シリーズ等を展開し、事業を拡大させていきました。その中でも、アキワークスを一躍有名にしたのは、8年前にドイツからのオファーを受けたことでした。ドイツメーカーを展開し、ファミリー層の支持を得たことにより、今までの作業場では手狭になり、平成21年に旧西武蔵小学校に移転しました。その後、海外への輸出も増え、業績も順調でしたが、平成24年頃から伸び悩むようになりました。そこで、よりクリエイティブで効率の良い仕事、そしてより精度の高い製品づくりを目指し、平成25年6月からは勤務日の勤務時間を増やし、休みを1日増やす変形労働時間制「国東時間」を始めました。国東時間とは、一日増えて週3日になった休日を、自己を磨くための時間や地域貢献活動の時間に有効に活用してもらうことで、社員一人ひとりの創造性を高めていこうと考えたからでした。



▲レーザー加工で出したススを拭く作業

現在、より社員一人ひとりの創造性を高めるために、今一度ビジネスモデルの再構築に取り組んでいます。地域貢献活動や自己研鑽活動に対する手当の創設など考えつつ、最終的には、週の半分3・5日の勤務で事業が成り立つ会社を目指しています。



▲最初に作った型のマネキン



▲出荷作業

認定  
農業者編



▲前列左から2人目が岸田和章さん、3人目が妻のさち江さん

岸田果樹園

国見町竹田津  
高品質のミカン栽培に取り組む

岸田和章さんは、東京の大学で農業を学んでいました。在学中に熊本のミカン農家で1か月間実習し、高品質のミカン作りで経営を安定させている姿に接し、卒業後は実家のミカン栽培をすることを決意しました。実家に戻ると、徐々にミカンの栽培面積を増やしていき、2ヘクタールから5ヘクタールへと増やしました。そして、透湿性シートを使って常に地面を乾燥状態にするマルチ栽培にこだわり、ミカン本来の味を引き出せるよう収穫をぎりぎりまで遅らせて味を凝縮させました。しかし、自分が考えていたミカンの味に近づいてはきましたが、経営は苦しい状況でした。転機は、10年前に段ボールのデザインを国見町に移住して来ていたイラストレーターの中野伸哉さん

に依頼したことでした。懐かしいミカン本来の味がすることから、「温故蜜柑」と命名してブランドを立ち上げることになりました。ちょうどその時、大分県が東京のスーパーを紹介してくれて、販売ができるようになりました。そこから、評判が広がっていき、全国の有名ミカン産地に引けを取らない値段で取引されるようになりました。そして、4年前から「デコポン」や「はるみ」、「なつみ」等の栽培にも取り組み、気温や湿度を一定に保ちやすいトンネルの特性を活かしたトンネル熟成を始め、妻のさち江さんも一緒に作業をするようになりました。さち江さんは、「パティシエの勉強している娘が、『いずれは、お父さんの作ったミカンを使ったスイーツを作りたい』と言っているの、もっとおいしいミカンと一緒に作っていきたい」、和章さんは「やっとな自分の作るミカンが、理想とする味に近づいてきました。全国にはまだまだ自分よりも高い品質のミカンを作る人がたくさんいるので、追いつけるように精進していききたい」と話していました。



は「やっとな自分の作るミカンが、理想とする味に近づいてきました。全国にはまだまだ自分よりも高い品質のミカンを作る人がたくさんいるので、追いつけるように精進していききたい」と話していました。

林業・  
水産業編



▲右から宮内聡哉さん、藤原寛一さん

宮内 聡哉さん

武蔵町糸原  
4年前からシイタケ栽培を始める

宮内聡哉さんは、18年前に仕事の都合で、福岡県から武蔵町にやって来まし

た。5年前に勤めていた会社の事業所が閉鎖され、起業を考えていたところ、大分市役所でシイタケ栽培の研修資料を目にしたことから、シイタケ栽培に興味を持ちました。国東市役所で、シイタケ栽培を始めるのにどれだけお金がかかるか確認したところ、少ない自己資金でも可能と分かり、シイタケ栽培の研修を受けることを決めました。研修先は、武蔵町丸小野で4年以上高品質のシイタケを栽培する藤原寛一さんで



した。藤原さんは、農機具も市内に身内もない厳しい条件の中で、一人で奮闘している宮内さんの姿に感激し、新規参入に向けてほだ場に適した山探しや山を借りる交渉を手助けしました。そして、半年の研修が終わった後も、自分のところで仕事を手伝うように申し出をしました。それは、シイタケ栽培で安定した収入を得られるようになるまで、自分のところを手伝うことで得る賃金で、苦しい時期を凌いで欲しいと考えたからでした。



それから宮内さんは、月20日を藤原さんのところで働き、残りの時間を自分のシイタケ栽培の準備に当てました。藤原さんは、「宮内さんを応援するために、自分のところを手伝ってもらっているが、残りの時間で毎年約9万コマのコマ打ちを一人でしているから、1年の内で休んでいるのは元旦ぐらいじゃないかと思う。初収穫までやっとなり着いたが、収入が安定するまでは、あと3年かかるので、体に気を付けて頑張りたい」、宮内さんは、「念願の初収穫を迎えましたが、どれだけ収穫できるか不安もあります。しかし、藤原さん夫婦が仲良く作業をする姿に憧れ、シイタケ農家になったので、ゆくゆくは妻と一緒にシイタケ栽培ができるように頑張りたい」と話していました。

